

畜産会 経営情報

主な記事

- ① セミナー経営技術
経営診断が「きっかけ」で儲かる肉用牛肥育経営を实践
—宮崎陽輔さん、舞さんの肉用牛肥育経営—
(公社)佐賀県畜産協会 辻 秀史
- ② 行政の窓
CSF(豚コレラ)終息に向けた今後の対策について
農林水産省消費・安全局動物衛生課
- ③ 畜産データボックス
畜産クラスターに係る全国実態調査結果について
—肉用牛肥育経営編— (公社)中央畜産会 道源 由紀
- ④ お知らせ
肉用牛肥育経営安定交付金制度(牛マルキン)の交付金単価

公益社団法人 中央畜産会

〒101-0021 東京都千代田区外神田2丁目16番2号
第2デューアイシービル9階
TEL 03-6206-0846 FAX 03-5289-0890
URL <http://jlia.lin.gr.jp/cali/manage/>
E-mail jlia@jlia.jp

セミナー

経営技術

経営診断が「きっかけ」で儲かる 肉用牛肥育経営を实践

—宮崎陽輔さん、舞さんの肉用牛肥育経営—

(公社)佐賀県畜産協会 辻 秀史

はじめに

佐賀県畜産協会(以下、協会)が経営支援を行っている宮崎牧場は、佐賀県唐津市に位置しています。当地域は唐津市と玄海町にまたがる「上場地域」と呼ばれ、標高100~200mの波状卓上台地です。

唐津市は佐賀県の北西部に位置し、対馬海流の影響を受けて冬季は比較的温暖で、平均気温は16℃前後で、降水量は年間約1800mm程度です。農畜産物の生産や観光が有名な地域です。

国の特別名勝「虹の松原」や特別史跡「名護屋城」、ユネスコ無形文化遺産に登録された「唐津くんち」など観光資源に恵まれてお



宮崎さんご家族

り、毎年、多くの観光客が訪れます。

唐津市と玄海町を範囲とする唐津農業協同組合（以下、JA からつ）は、温暖な気候を生かして農畜産業が盛んで、平成30年度の肥育牛販売頭数は8999頭、販売額は99億9000万円で、畜産部門は全体の48.7%を占め、佐賀牛やそのもととなる子牛生産が盛んであり、佐賀県の農畜産物のトップブランドである「佐賀牛」生産の拠点となっています。耕種部門でも、全国一位のハウスみかんをはじめ、イチゴ、タマネギの生産が多くなっています。

管内には、肥育素牛の安定供給のためにJAのキャトルステーションが整備されており、良質な子牛生産に取り組んでいます。

経営・技術の特色



（1）経営診断による経営改善への取り組み

平成12年に陽輔さんは就農し、父より畜産に関する仕事や部会活動など全てを任されたため、何事も一から勉強することとなりました。

平成22年に経営移譲を受けましたが、肥育牛の規模拡大や肥育成績が芳しくなかったため、翌年JAの勧めにより協会の経営診断を受診することとなりました。

陽輔さんは経営診断結果を見て、「経営内容を数字で見て衝撃を受けた。意識を変えざるを得なかった」と後日言うておられます。経営を数字で把握することの大切さを実感し、経営内容の至る所に所得のロスがあることが散見され、経営管理がうまくいっていな

いと痛感したのです。

そこで、1日当たり増加額をアップするために、死亡事故頭数を減らすことと肥育成績、特に増体量と枝肉重量のバラツキの改善に取り組むこととしました。

また、協会では、畜産農家の意欲向上と飼養管理技術や経営内容の改善などを経営診断の成果として考え、担当者を固定して継続的に対応することで農家との信頼関係の構築を図るとともに、PDCAサイクルの考え方を取り入れました。

経営診断については、分析結果はグラフ等を工夫して「見える化」を図り、助言については、「課題と対策」のシンプルなものにして、農家取り組みやすく、費用がかからず、改善効果が高く、優先順位が高いものに絞り込むなど工夫しました。改善効果を高めるために、ボトルネックをなくす、得手・不得手を把握し良好な部分を選択し増やすなどのポイントを重視しました。

（2）飼養管理に適した肥育素牛の導入

肥育素牛の選定については、JAからつや協会とともに自らの肥育成績のデータ分析に取り組み、宮崎牧場の飼養管理に最も適した肥育素牛の産地や血統、発育状態を集計分析し、その結果をもとに導入することを指導しました。

同時に、素牛の目利き上達のため、導入した素牛ごとに「出荷時の肥育牛」の外見、体型、肉質などをイメージすることで、どの程度の肥育成績になるかを想定するとともに、

(表1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和45年	ミカン 肥育牛	肥育牛1頭		・ミカン経営（徐々に縮小） ・ホルスヌレ子1頭から肥育牛飼養開始
平成12年	肥育専業	黒毛300頭		・後継者として就農（20歳） ・家族経営協定の締結
15～16年	肥育専業	黒毛600頭		・牛舎増築 ・もと牛導入先を宮崎県から鹿児島県に変更
19年	肥育専業	黒毛750頭		・牛肉の輸出開始（香港）
22年	肥育専業	黒毛750頭		・経営移譲
23年	肥育専業	黒毛750頭		・経営診断を受診 ・新しい配合飼料試験を開始 ・稲 WCS を開始 ・宮崎牧場で小学生の食育活動を開始
25年	肥育専業	黒毛710頭		・青年部会研修会に、経営分析を取り込む
30年	肥育専業	黒毛710頭	牧草520a 稲 WCS 1,600a 稲わら収集 6,000a	・佐賀牛の販売促進活動としてタイで佐賀牛指定店認証式に参加（JA からつ肥育牛部会） ・青年部の部会長に就任
令和元年	肥育専業	黒毛720頭		・株式会社 佐賀牛宮崎牧場を設立（8月）

出荷時の肥育成績がどうであったかを、継続的に比較検討しました。

現在、予想どおりの肥育成績になった牛が7割、予想以上が2割、予想を下回る牛が1割程度となっており、「徐々に素牛の目利きが利くようになってきた」と感じておられます。

素牛の導入先については、飼養管理に適した価格面も有利である鹿児島県の離島を開拓しました。

(3) 従業員が一体となり肥育成績の向上に取り組む

経営診断により、肥育牛の死亡事故による収入のロスや収入に結びつかない経費ロスを実感されたため、死亡事故対策として、毎晩、深夜1時に牛舎を巡回し、肥育牛に異常がないかチェックしています。

肥育成績の向上に向け従業員との定期的な試食会の開催や、枝肉共励会等での入賞牛の肉質の確認など、日頃の作業は何のためにやっているかの情報共有に努めています。

また、毎日10時と3時の休憩時間を「お茶

の時間」とし、従業員とコミュニケーションを図り、飼料給与量の調整、飼養管理の進捗状況や肥育牛の状態、前日の出荷牛の枝肉成績などについての情報共有を図っています。

これらの取り組みにより、異常牛の早期発見、早期治療が実践でき、肥育牛の死亡事故頭数は平成22年に22頭（事故率3.1%）だったものが、平成30年は9頭（同1.2%）に減

少ししました。

同様に、平成30年の肥育成績は、平成22年と比較すると、導入体重は小さくなっていますが、出荷体重が96.9kg 増え709.8kg へ、枝肉重量が74.7kg 増え460.6kg へ増加しました。肥育牛を理解し、飼料給与量の適正化を図ったことにより、肉質も4・5率が83%と2倍になりました。肥育成績は、令和元年も

(表2) 経営実績

経営の概要	労働時間（畜産）		家族・構成員	6,495時間
			雇用・従業員	12,240時間
	〈労働従事人数（家族・構成員）〉			4人
	〈労働日数／1人（家族・構成員）〉			217日
	労働力員数（畜産・2000hr換算）		家族・構成員	3.2人
			雇用・従業員	6.1人
	肥育牛平均飼養頭数		肉用種	720.4頭
			交雑種	頭
			乳用種	頭
	年間肥育牛販売頭数		肉用種	422頭
交雑種			0頭	
乳用種			0頭	
所得率				7.2%
生産性 (黒毛和種種雌若齢)	肥育開始時	日齢	266日	
		体重	243.5kg	
	販売肥育牛1頭当たり	出荷日齢	876日	
		出荷時生体重	709.8kg	
	平均肥育日数			610日
	販売肥育牛1頭1日当たり増体重(DG)			0.77kg
	対常時頭数事故率			1.2%
	販売肥育牛1頭当たり販売価格			1,250,854円
	販売肥育牛生体1kg当たり販売価格			1,762円
	枝肉1kg当たり販売価格			2,650円
	肉質等級4以上格付率※			83.0%
もと牛1頭当たり導入価格			732,524円	

さらに向上しています。

肥育成績の向上は、販売金額の増加につながりました。

(4) 肥育牛部会が一体で増体量向上に取り組む

平成18年以降の配合飼料価格や輸入粗飼料価格の高騰、高止まりの対応として、JAからつ肥育牛部会では、独自の配合飼料を作り上げることとしました。

部会員である肥育農家が自ら飼料給与試験を行い、平成23年から肥育農家での飼料給与を開始し、定期的に血液検査の実施と肥育成績の分析を行い、その結果により飼料給与量などが適正であるかを検証し、飼料給与体系に反映させることで、地域独自の配合飼料と飼料給与体系を確立しました。

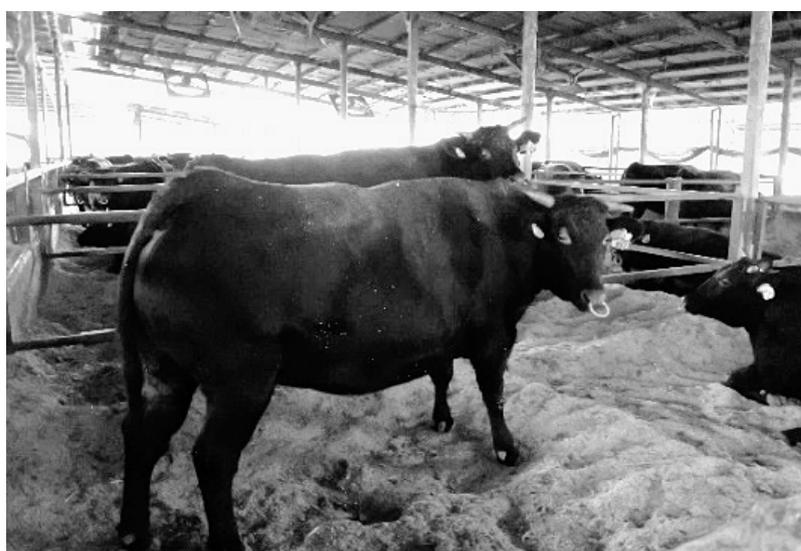
陽輔さんも肥育牛部会の役員として新しい配合飼料の飼料給与試験に参加し、部会員の意見調整に努めました。

平成23年に、青年部は共通の勉強テーマとして、年2回、青年部会員の牛舎環境や肥育牛の状態を観察する現地巡回を実施しました。

自分が経験した経営分析を青年部仲間にも広めたいと考え、平成25年からは、現地巡回とともに畜産協会で分析した部会員個々の肥育成績について全員による検討を始め、地域としての肥育成績の改善に取り組みました。

現地巡回を繰り返すことにより、牛舎構造、飼料給与方法や素畜選定などにも忌憚のない意見を出し合い、それぞれの農家の飼養管理の工夫など情報交換を行い、切磋琢磨することとなったのです。

現在、青年部の肥育成績は、主体となる和牛雌の若齢肥育で枝肉重量は455.6kgと県平均を12kgほど上回っています。また死亡事故率も1%と基準の範囲内となっています。



肥育牛舎内は清潔な敷料で牛へのストレスを軽減

(5) 肥育成績を向上させた取り組み

まず、肥育素牛の導入時にワクチン接種、駆虫剤投与、ビタミンA補給を実施しています。

次に、肥育前期は4～8頭に群分けを行い、粗飼料を1日に3～4回に小分けして給与するとともに、飼槽にはスタンションまたは仕切り棒で区分することで飼料摂取量のバラツキを減らし、個体の強弱による発育のバラツキを最小限にとどめています。

導入して7ヵ月目に、2～3頭の仕上げ舎に移動しますが、肥育牛の相性を見て群分けを行い、群飼によるストレスの低減を図っています。なお、仕上げ舎は、肥育牛1頭当たりの牛床面積を8㎡確保しています。

(6) コスト削減への取り組み

増頭によるスケールメリットを生かした購



青年部での現地巡回 オープンに意見交換

入飼料費の節減に努め、平成23年からは、稲ワラの収集や、牧草ラップサイレージの調達、稲WCSの増産により、天候の条件によっては、ヘイキューブのみを購入し、乾草の購入をゼロにすることができるようになりました。

また、敷料にはオガクズを50%、地元のライスセンターから無料で調達するモミガラを30%、完全発酵させたりサイクル堆肥を20%混合して利用するといった工夫をしています。

素畜費の低減を加えると、推定で出荷牛1頭当たり12万円以上のコストの削減が図られています。

(7) 関連会社を通し枝肉成果をフィードバック

極力、枝肉セリに立会し購買者と意見交換



タイのレストランでの佐賀牛指定店認証式

することで、購買者から高い評価を受ける意見を飼養管理にフィードバックしています。

また、陽輔さんの父が設立した「有限会社愛郷ファーム」で、毎月、当経営から出荷した2頭以上のロース芯などの面積、脂肪交雑、肉付きや肉色、きめ・しまりなどの肉質、モモの部分の脂肪交雑（モモ抜け）などを確認し、枝肉に異常がないか、飼養管理が適正だったかなどを確認できる体制が構築されています。このため、購買者にはBMSナンバー以上の評価を受けているようです。

(8) 牛肉輸出で魅力のある肥育経営を目指す

陽輔さんは、平成19年から年間25頭程を輸出用に出荷しており、さらに増加させたいと考えています。また、佐賀県農林水産物等輸出促進協議会活動の一環として、香港やタイ、マレーシア、台湾など東南アジア諸国への現地視察、販売促進活動にも積極的に参加し、海外のニーズも満たせるような肥育牛生産を目指しています。平成30年度は、タイで佐賀牛指定店認証式に肥育牛部会員として参加し、海外の消費者や購買者と交流を図り、新しい肥育経営の在り方を構築しています。

陽輔さんは、「肥育農家が生産した牛肉を、自ら出向いて国内外の購買者や消費者と交流し、PRすることも大切ではないか」、「オール佐賀、さらにはオール日本で、若い肥育農家の仲間とともに、牛肉輸出、海外への販路拡大にもとりくんでいきたい」と考えています。

耕畜連携の活動



稲ワラ収集、稲 WCS 生産、牧草（ラップ）の生産面積を増やすことで、耕作放棄地対策に尽力されています。生産に当たっては、自給飼料専用パートを雇用し自家産の堆肥を供給し耕畜連携に努めています。

さらに、佐賀平野でも稲ワラ収集や稲 WCS を調達し、地域資源を有効に活用しています。

今後は、稲 WCS を肥育後期にも給与する計画であり、佐賀平野でのニーズも高いことから、さらに調達量を増やしていきたいと考えています。

おわりに



宮崎牧場では、平成23年から毎年、地元の打上小学校の1～2年生を牧場に招いて、食育活動を実施しています。

また、家族労働力4名と常雇2名、パート7名を雇用されていますが、「みんなが働きたいと思うような会社を作り、地元の若者に働く場所を提供したい」と考え、さらに将来の規模拡大を見据え従業員を確保しやすい状況を目指して、令和元年8月には「株式会社佐賀牛宮崎牧場」を設立されました。

陽輔さんは、「将来は、肥育牛を1000頭、2000頭と増頭するとともに、国内外の消費者と交流し、仲間とともに佐賀牛ブランドの向上に努めたい」と話されました。

(筆者：(公社)佐賀県畜産協会
畜産経営支援部経営支援課長)

行政の窓

CSF（豚コレラ）終息に向けた今後の対策について

農林水産省消費・安全局動物衛生課

令和元年9月5日、農林水産省豚コレラ防疫対策本部において、「豚コレラ終息に向けた今後の対策」が決定されました。

具体的には、(1) 野生イノシシ対策（捕獲等の強化、経口ワクチン散布等）、(2) 感染経路遮断対策（衛生管理の向上等）、(3) ワクチン接種、(4) 水際検疫体制の強化（検疫探知犬の増頭等）などを行うとともに、動画等を活用した情報発信を強化します。

動画はこちらから
ご覧ください



CSFに関する Q&A（抜粋）

Q. CSF とは、どんな病気ですか？

A. CSF は、CSF ウイルスが豚やイノシシに感染することで起こる病気です。伝染力が強く、家畜伝染病に指定されています。CSF に感染した豚が発生した農場では、飼養されている豚等を対象に防疫措置を行います。

Q. CSF にかかった豚の肉は、市場に流通しますか？

A. 法律に基づき、豚肉は全て検査に合格したものだけが流通することになっています。検査で CSF であると確認された肉や内臓などについては、市場に流通することはありません。

Q. 今回使用する CSF ワクチンを接種した豚の肉を食べた場合、人の健康に影響はありますか？

A. CSF ワクチンを接種した豚の肉を食べても、人の健康に影響はありません。

Q&A にはこちらからアクセスできます▶



図書のご案内

畜産経営者・経営指導者待望の新刊!

令和元年
12月20日
発売開始

畜産経営者のための 青色申告の手引き

— 令和元年分確定申告対応 —

森 剛一 著



表紙は平成 29 年度版のもので

畜産経営の発展を図るためには、記帳に基づく経営管理の一層の改善および合理化が求められます。本書は、好評を博した平成15年版以降改訂を重ね、今般大幅な見直しを行った改訂版で、各種奨励金・補てん金、肉用牛免税等優遇税制や共済金・共済掛金等の経理処理といった最新の事業制度にも対応。畜産経営者・経営指導者必携の一冊です。

【主な内容】

- 第1章 青色申告の制度：第1節 青色申告とは、第2節 青色申告のできる者、第3節 青色申告の特典、第4節 青色申告の手続き、第5節 備え付けるべき帳簿類、第6節 消費税の概要
 - 第2章 畜産経営の簿記記帳実務：第1節 簿記記帳の基礎知識、第2節 記帳から決算までの流れと仕組み、第3節 勘定科目、第4節 単式簿記から複式簿記への切り替え法、第5節 留意すべき期中の取引
 - 第3章 決算と確定申告：第1節 決算整理、第2節 決算書の活用、第3節 青色申告決算書の作成、第4節 確定申告の作成、第5節 消費税申告書の作成
 - 第4章 事業継承と法人化の税務：第1節 事業継承の税務、第2節 法人化の税務
- 参考資料 確定申告書B記入例、勘定科目一覧表（参考例）、肉用牛売却所得の課税の特例措置について

お問い合わせ・お申込みは下記まで

公益社団法人中央畜産会 経営支援部（情報）

〒101-0021 東京都千代田区外神田 2-16-2 第2 ディアイシービル 9階

TEL：03-6206-0846 FAX：03-5289-0890 Email：book@jlia.jp

畜産データボックス

畜産クラスターに係る全国実態調査結果について

—肉用牛肥育経営編—

(公社) 中央畜産会 道 源 由 紀

はじめに

先月号では平成30年度畜産・酪農収益力強化整備事業等対策事業のうち、畜産クラスターに係る全国調査実態調査の結果の中から、肉用牛繁殖経営について報告しました。

今月号は肉用牛肥育経営に焦点を当て、家族労働力1人当たり所得階層別の比較を行いました。平成30年度の調査結果は、中央畜産会ホームページ(<http://jlia.lin.gr.jp/cluster/>)に掲載しています。

調査の概要

平成29年1～12月の間に期首を迎えた事例を対象に、全国の37戸の肉用牛肥育経営（主に黒毛和種去勢肥育）で調査を実施しました。家族労働力1人当たりの所得の高い順から、所得階層を上位20%グループ（以下、上位）、中位60%グループ（以下、中位）、下位20%グループ（以下、下位）と分け、差が顕著となる上位と下位で比較しました。

1. 調査結果の特徴

家族労働力1人当たりの年間経常所得は、上位が1663万2千円であるのに対し、下位は

マイナス884万7千円であり約2500万円以上の差がありました。家族労働力1人当たり年間経常所得は、肥育牛1頭当たり年間経常所得×労働力1人当たり肥育牛飼養頭数で表せることから、それぞれの項目を見てみると、

- ・肥育牛1頭当たり年間経常所得は、上位が20万3千円であるのに対し、下位はマイナス6万4千円であり26万7千円の差があった。
- ・労働力1人当たり肥育牛飼養頭数は、上位が65.9頭であるのに対し、下位は76.0頭と約10頭上位で少なかった。

このことから、家族労働力1人当たり所得の差は、肥育牛1頭当たり年間経常所得が上位で大幅に高いことにより大きな差となっています。

2. 経営の概要

表1に経営の概要を示しました。

1戸当たりの労働員数は、全体が2.5人、上位3.4人、下位は2.2人であり、上位は下位より1.2人多くなりました。そのうち家族員数は上位が2.4人、下位が1.4人であり、上位は下位より1.0人多くなりました。

肥育牛の飼養頭数は、全体が148.4頭、上

(表1) 経営の概要

経営の概要		全体	下位20%	中位60%	上位20%	
集計件数		37	8	21	8	
労働力	労働力員数 (人)	2.5	2.2	2.2	3.4	
	うち家族員数 (人)	1.9	1.4	1.9	2.4	
飼養頭数	肥育牛	肉用種 (頭)	148.4	136.4	119.1	237.3
		乳用種 (頭)	0.0	0.0	0.0	0.0
		交雑種 (頭)	0.1	0.0	0.1	0.0
		計 (頭)	148.4	136.4	119.2	237.3
のべ面積	耕・草地	個別利用自作地 (a)	80.5	67.3	38.1	205.0
		個別利用借地 (a)	14.3	7.5	19.4	7.5
		共同利用地 (a)	0.0	0.0	0.0	0.0
		計 (a)	94.8	74.8	57.5	212.5
生産・販売量	肉用種	去勢若齢肥育(頭)	64.3	72.8	54.6	81.1
		雌若齢肥育(頭)	19.6	5.8	12.3	52.9
		成牛肥育(頭)	0.1	0.0	0.0	0.4
		小計 (頭)	84.0	78.5	66.9	134.4
	乳用種	一貫肥育(頭)	0.0	0.0	0.0	0.0
		若齢肥育(頭)	0.0	0.0	0.0	0.0
		成牛肥育(頭)	0.0	0.0	0.0	0.0
		小計 (頭)	0.0	0.0	0.0	0.0
	交雑種	一貫肥育(頭)	0.0	0.0	0.0	0.0
		若齢肥育(頭)	0.3	0.0	0.6	0.0
		小計 (頭)	0.3	0.0	0.6	0.0
		合計 (頭)	84.3	78.5	67.5	134.4

位237.3頭、下位は136.4頭であり、上位は下位に比べ100.9頭(74%)多くなりました。肉用種の出荷頭数は、全体が84.0頭、上位134.4頭、下位は78.5頭であり、上位は下位に比べ55.9頭(71%)多くなりました。

3. 収益性

表2に損益を示しました。

肥育牛1頭当たりの売上高は、全体が77万1千円、上位83万7千円、下位は76万3千円であり、上位は下位に比べ7万4千円(10%)多くなりました。そのうち肥育牛販売収入は全体が76万7千円、上位83万3千円、下位は76万1千円であり、上位は下位に比べ7万2千円(9%)多くなりました。

肥育牛1頭当たり売上原価は、全体が69万2千円、上位60万4千円、下位は78万5千円であり、上位は下位に比べ18万1千円(23%)少なくなりました。当期生産費用をみると、全体が76万、上位74万9千円、下位は80万5千円であり、上位は下位に比べ5万6千円(7%)少なくなりました。

生産費用のうち占める割合が最も大きいもと畜費をみると、全体が46万4千円、上位47万円、下位は48万円であり、上位は下位に比べ1万円(2%)少なく、上位と下位に大きな差はみられませんでした。

次に割合が大きい購入飼料費は、全体が19万5千円、上位18万5千円、下位は24万3千円であり、上位は下位に比べ5万8千円(24%)少なく、上位と下位に大きな差がみられませんでした。その他の費用については、上位と下位に大きな差はみられませんでした。肥育牛1頭当たり売上総利益は、全体が7万9千円、上位23万3千円、下位はマイナス2万2千円であり、上位は下位に比べ25万5千円多くなりました。

肥育牛1頭当たり経常利益は、全体が2万3千円、上位17万2千円、下位はマイナス9万3千円であり、下位は利益がマイナスとなり、上位と比較して26万5千円の差がありました。これは、上位が下位に比べ肥育牛販売収入が多く、生産費用が少ないため、経常利益の差が大きくなりました。肥育牛1頭当たり経常所得は、全体が6万4千円、上位20万

(表2) 損益 (家族労働力1人当たり所得階層別)

損益 (補助金を圧縮する場合) 肥育牛1頭当たり (円)		全体	下位20%	中位60%	上位20%	
集計件数		37	8	21	8	
売上高	子牛販売収入	0	0	0	0	
	育成牛販売収入	0	0	0	0	
	肥育牛販売収入	766,944	761,239	744,002	832,873	
	堆肥販売・交換収入	4,121	1,797	5,123	3,813	
	その他	53	14	0	231	
	計	771,118	763,049	749,125	836,917	
売上原価	期首飼養牛評価額	965,786	1,017,652	907,609	1,066,635	
	種付料	139	0	246	0	
	もと畜費	463,554	480,015	454,470	470,937	
	購入飼料費	195,348	243,456	180,810	185,402	
	自給飼料費	730	455	907	540	
	敷料費	2,955	2,968	2,834	3,257	
	労働費	雇用	6,755	8,025	5,206	9,548
		家族	40,968	29,026	49,478	30,572
		計	47,723	37,051	54,685	40,121
	診療・医薬品費	6,346	6,595	7,071	4,193	
	電力・水道費	5,819	7,259	5,541	5,106	
	燃料費	4,928	5,325	4,863	4,703	
	減価償却費	建物・構築物	5,556	4,683	6,214	4,702
		機器具・車輛	10,060	5,487	11,237	11,542
		家畜	340	0	599	0
	計	15,956	10,170	18,050	16,245	
	修繕費	8,571	8,187	9,371	6,854	
	小農具費	1,554	2,323	1,604	654	
	消耗諸材料費	4,664	715	4,516	9,000	
	賃料料金その他	1,465	928	1,602	1,642	
	当期生産費用合計	759,751	805,448	746,570	748,652	
	期中成牛振替額	0	0	0	0	
	期末飼養牛評価額	1,033,041	1,038,367	962,981	1,211,621	
売上原価	692,496	784,732	691,199	603,666		
売上総利益		78,622	-21,683	57,926	233,251	
一般管理費	販売経費	43,851	59,145	35,720	49,900	
	共済掛金等	10,522	12,481	9,796	10,471	
	その他	15,067	11,824	17,090	12,998	
	計	69,440	83,450	62,606	73,368	
営業利益		9,182	-105,133	-4,679	159,883	
営業外収益	受取利息	4	0	7	0	
	奨励金・補填金	20,608	24,658	19,138	20,418	
	成牛処分益	0	0	0	0	
	その他	6,178	0	8,606	5,983	
	計	26,791	24,658	27,751	26,402	
営業外費用	支払利息	5,944	5,315	6,280	5,690	
	支払地代	389	223	585	40	
	経営安定積立金	5,788	6,513	5,403	6,076	
	成牛処分損	0	0	0	0	
	その他	905	272	581	2,388	
計	13,025	12,322	12,848	14,194		
経常利益		22,947	-92,797	10,223	172,091	
経常所得		63,915	-63,771	59,702	202,663	
当期償還額控除所得		15,960	-70,214	-12,104	175,800	
同上償却費加算額		31,915	-60,044	5,946	192,045	

(表3) 収益性諸要因分析 (家族労働力1人当たり所得階層別)

収益性諸要因分析 (肥育主体経営)	全体	下位20%	中位60%	上位20%
集計件数	37	8	21	8
家族労働力1人当たり年間経常所得 (千円)	4,018	-8,847	4,113	16,632
肥育牛1頭当たり年間経常所得 (円)	63,915	-63,771	59,702	202,663
出荷牛1頭当たり年間経常所得 (円)	120,910	-126,777	109,743	397,909
労働力1人当たり肥育牛飼養頭数 (頭)	64.3	76.0	59.2	65.9
肥育牛1頭当たり年間労働時間 (時間)	36	30	38	35
肥育牛1頭当たり年間飼養管理労働時間 (時間)	32	28	34	33
飼料生産のべ10a当たり労働時間 (時間)	9	2	12	11
雇用依存率 (%)	14.5	16.1	11.7	20.1
肥育牛1頭当たり耕・草地のべ面積 (a)	0.7	0.5	0.5	1.3
肥育牛1頭当たり借入地面積 (a)	0.1	0.2	0.2	0.1
借入地依存率 (%)	8.6	8.3	9.6	6.3
借入地のべ10a当たり年間平均支払地代 (円)	19,114	14,880	24,174	8,167
肥育牛1頭当たり野草地面積 (a)	-	-	-	-
所得率 (%)	8.8	-9.0	8.1	28.3
売上高経常利益率 (%)	3.2	-12.7	1.3	24.2
肥育牛1頭当たり販売価格 (円)	1,352,322	1,360,344	1,327,225	1,410,181
肉用牛生体1kg当たり販売価格 (円)	1,798	1,931	1,739	1,818
実際販売単価 (枝肉出荷の場合) (円)	2,644	2,907	2,576	2,560
肥育牛1頭当たり出荷時体重 (kg)	755	713	764	775
もと牛1頭当たり購入価格 (円)	753,843	828,123	723,271	759,815
もと牛生体1kg当たり導入価格 (円)	2,918	3,094	2,928	2,713
導入時平均もと牛体重 (kg)	270	270	266	280
年間肥育回転率 (回)	0.57	0.57	0.56	0.59
平均肥育日数 (日)	640	648	637	642
販売肥育牛1頭1日当たり増体重 (kg)	0.76	0.68	0.78	0.77
対導入頭数事故率 (%)	2.3	1.8	3.0	1.0
対常時頭数事故率 (%)	1.3	1.1	1.7	0.5

3千円、下位はマイナス6万4千円であり、上位は下位と比べ26万7千円多くなりました。

4. 生産技術水準

表3に収益性諸要因を示しました。

1) 労働力、労働時間

労働力1人当たり肥育牛飼養頭数は、全体が64.3頭、上位65.9頭、下位は76.0頭であり、上位は下位に比べ10.1頭少なくなりました。肥育牛1頭当たり年間労働時間は、全体

が36時間、上位35時間、下位は30時間であり、上位は下位と比べ5時間多く、上位は下位に比べて労働力が多く、労働時間が長くなりました。

雇用依存率は、全体が14.5%、上位20.1%、下位は16.1%であり、上位は下位と比べ4%多くなりました。

2) 土地利用

肥育牛1頭当たり、耕・草地のべ面積は、全体が0.7a、上位1.3a、下位は0.5aであり、上位は下位と比べ0.8a多くなりました。借

(表4) 施設投資・資金借入状況 (家族労働力1人当たり所得階層別)

施設投資・資金借入状況	全体	下位20%	中位60%	上位20%
集計件数	37	8	21	8
肥育牛1頭当たり施設機器具平均投資額 (円)	84,673	109,116	87,211	53,570
肥育牛1頭当たり資金借入残高 (円)	544,283	253,622	499,793	951,733
肥育牛1頭当たり年間借入金償還負担額 (円)	47,956	6,443	71,806	26,863
経常所得対借入金償還額比率 (%)	88.3	57.7	126.8	18.0

入地のべ10a 当たり年間平均支払地代は、全体が1万9千円、上位8千円、下位は1万5千円であり、上位は下位と比べ7千円少なくなりました。

3) 所得率

所得率は、全体が8.8%、上位28.3%、下位はマイナス9.0%であり、上位は下位と比べ37.3%多く、格差が大きくなりました。

4) 生産技術

肥育牛1頭当たり販売価格は、全体が135万2千円、上位141万円、下位は136万円であり、上位は下位と比べ5万円(3.7%)高くなりました。肉用牛生体1kg当たり販売価格は、全体が約1800円、上位約1800円、下位は約1900円であり、上位は下位と比べ約100円(5.2%)低くなりました。

肥育牛1頭当たり出荷時体重は、全体が755kg、上位775kg、下位は713kgであり、上位は下位と比べて62kg(8.7%)多くなりました。もと牛1頭当たり購入価格は、全体が75万4千円、上位76万円、下位は82万8千円であり、上位は下位と比べ6万8千円(8.2%)低くなりました。

年間肥育回転率は、全体が0.57回、上位

0.59回、下位は0.57回であり、上位は下位と比べ0.02回多いが、ほぼ変わりませんでした。

販売肥育牛1頭1日当たり増体重は、全体が0.76kg、上位0.77kg、下位は0.68kgであり、上位は下位と比べ0.09kg多くなりました。

対常時頭数事故率は、全体が1.3%、上位0.5%、下位は1.1%であり、上位は下位と比べ0.6%少なくなりました。

上位は下位と比べ生体1kg当たり販売価格は低いものの、販売肥育牛1頭1日当たり増体重が多く出荷時体重が多いため1頭当たりの販売価格が高くなりました。

5. 経営の安全性

表4に施設投資・資金借入状況を示しました。

肥育牛1頭当たり施設機器具平均投資額は、全体が8万5千円、上位5万4千円、下位は10万9千円であり、上位は下位と比べ5万5千円(50%)少なくなりました。

肥育牛1頭当たり資金借入残高は、全体が54万4千円、上位95万2千円、下位は25万4千円であり、上位は下位と比べ69万8千円(3.75倍)多くなりました。下位については、

経常利益がマイナスであることから、借入を行いながら経営を成り立たせていることがうかがえました。

肥育牛1頭当たり年間借入金償還負担額は、全体が4万8千円、上位2万7千円、下位は6千円であり、上位は下位と比べ2万1千円（4.5倍）多くなりました。

経常所得対借入金償還額比率は、全体が88.3%、上位が18%、下位が57.7%であり、上位は下位と比べ39.7%低くなりました。

上位は借入残高が多く償還額も多いが、経常所得が多いため、借入金償還額比率が低くなりました。

まとめ



家族労働力1人当たり所得階層上位では、下位に比べて次のような特徴がみられました。

①肥育牛の飼養頭数が多く、生産・販売頭数が多い、②肥育牛1頭当たりの購入飼料費が少ない、③肥育牛1頭当たりの年間経常所得が高い、④家族労働力1人当たり肥育牛飼養頭数が少なく、肥育牛1頭当たり年間労働時間が長く、肥育牛1頭当たりに手をかけている。

一方、収益性諸要因分析では、①もと牛1頭当たり購入価格が低く、肥育牛1頭当たりの販売価格が高い、②販売肥育牛1頭1日当たり増体重が大きく、肥育牛1頭当たりの出荷時体重も大きい。

これらの点を整理すると、上位は、家族労働

力1人当たり飼養頭数は少ないものの、肥育牛1頭当たり年間経常所得が高いことから、家族労働力1人当たり年間経常所得が高くなっていることが分かります。

肥育牛1頭当たり年間経常所得が高い要因を検討すると、肥育牛1頭当たり売上高が高く、売上原価が低いことが要因となっていますが、さらに詳しくみると、上位は、生体1kg当たり販売価格は安いですが、1頭当たり出荷時体重が多いため、肥育牛1頭当たり販売価格が高くなりました。

また、上位は、1頭1日当たり増体重が多いことが出荷時の体重が多いことにつながっていることがうかがえました。一方、生産費用についてみると、上位は、肥育牛1頭当たりの購入飼料費が少なく、もと畜費が若干低いことから、売上原価が低くなっており、コストが抑えられています。

これらのことから、上位は、飼養管理を丁寧にすることなどにより、1日当たり増体重が多く、出荷時の体重も多くしていると考えられます。そして、もと牛の選定の段階において体重が多く発育良好の牛を選定していることがうかがえました。

今回の調査結果を経営状況、損益、収益性等の目安として、また、経営改善のための参考として活用いただきたいと思います。最後に、調査にご協力いただいた道府県畜産協会の皆さまに厚くお礼申し上げます。

(筆者：(公社) 中央畜産会経営支援部
(支援・調査) 技師)

(独)農畜産業振興機構からのお知らせ**肉用牛肥育経営安定交付金制度(牛マルキン)の交付金単価****[令和元年10月分]**

令和元年10月に販売された交付対象牛に適用する畜産経営の安定に関する法律（昭和36年法律第183号）第3条第1項に規定する交付金について、肉用牛肥育経営安定交付金交付要綱（平成30年12月26日付け30農畜機第5251号）第4の6の（5）のオの規定および同（5）のカの規定により準用する同（1）から（4）までの規定に基づき標準的販売価格および標準的生産費ならびに交付金単価を表1および表2の通り公表しました。

なお、当該交付対象牛に係る交付金の交付については、概算払いを行います。標準的生産費および交付金単価の確定値については、令和2年2月上旬に公表する予定です。

(表1) 肉専用種の交付金単価 (概算払)

算出の区域	肉用牛1頭当たりの標準的販売価格	肉用牛1頭当たりの標準的生産費	肉用牛1頭当たりの交付金単価(概算払)※	算出の区域	肉用牛1頭当たりの標準的販売価格	肉用牛1頭当たりの標準的生産費	肉用牛1頭当たりの交付金単価(概算払)※
北海道	1,168,846円	1,196,336円	20,741.0円	石川県	1,407,260円	1,217,540円	—
青森県	1,175,438円	1,161,682円	—	福井県	1,399,151円	1,223,423円	—
岩手県 (日本短角種を除く)	1,164,460円	1,183,570円	13,199.0円	愛知県	1,160,276円	1,166,565円	1660.1円
岩手県 (日本短角種)	683,663円	738,867円	45,683.9円	鳥取県	1,218,380円	1,206,725円	—
宮城県	1,213,028円	1,200,828円	—	島根県	1,129,268円	1,204,701円	63,889.7円
秋田県	1,148,320円	1,164,231円	10,319.9円	岡山県	1,201,686円	1,189,830円	—
福島県	1,187,899円	1,216,838円	22,045.1円	広島県	1,176,300円	1,210,702円	26,961.8円
茨城県	1,191,988円	1,217,013円	18,522.5円	山口県	1,156,946円	1,211,541円	45,135.5円
栃木県	1,199,558円	1,192,915円	—	香川県	1,280,358円	1,195,179円	—
群馬県	1,185,936円	1,167,429円	—	愛媛県	1,180,076円	1,177,695円	—
埼玉県	1,182,664円	1,187,084円	—	福岡県	1,161,524円	1,222,745円	51,098.9円
千葉県	1,196,235円	1,208,840円	7,344.5円	佐賀県	1,185,716円	1,229,035円	34,987.1円
神奈川県	1,198,493円	1,119,182円	—	長崎県	1,147,376円	1,219,463円	60,878.3円
山梨県	1,173,611円	1,204,294円	23,614.7円	熊本県	1,157,762円	1,168,698円	5,842.4円
長野県	1,198,523円	1,218,641円	14,106.2円	大分県	1,184,264円	1,229,240円	36,478.4円
静岡県	1,145,473円	1,222,465円	65,292.8円	宮崎県	1,248,376円	1,224,646円	—
新潟県	1,205,613円	1,171,665円	—	鹿児島県	1,196,376円	1,243,742円	38,629.4円
富山県	1,377,516円	1,228,275円	—	沖縄県	1,119,007円	1,166,194円	38,468.3円
				二以上の都道府県の区域	1,260,466円	1,212,128円	—

(表2) 交雑種・乳用種の交付金単価 (概算払)

	肉用牛1頭当たりの標準的販売価格	肉用牛1頭当たりの標準的生産費	肉用牛1頭当たりの交付金単価(概算払)※
交雑種	742,229円	759,197円	11,271.2円
乳用種	459,766円	513,902円	44,722.4円

※肉用牛1頭当たりの交付金単価(概算払)は、肉用牛1頭当たりの標準的生産費と肉用牛1頭当たりの標準的販売価格との差額に100分の90を乗じた額から4,000円を控除した額

畜産映像情報 がんばる! 畜産! 3

今、畜産業は担い手不足や国際化の進展など、大きな変化の局面にあります。そんな中、飼料を自ら生産したり、省力化を図ったりと、さまざまな工夫で素晴らしい経営を行っている生産者がたくさんいます。

このサイトでは、そうした各地の優れた畜産経営や、後継者の活躍、おいしくて安全な畜産物を消費者の方々へ届けるまでを映像で紹介します。

この映像情報を生産者の方はもとより消費者の方々とも共有することで、元気で健全な畜産の発展につなげることを目指しています。



畜産トレンド発見!

このコンテンツでは、生産現場での省力化技術や、飼料用米やエコフィードなどの活用による飼料コスト削減など、「技術」に着目して各地の事例を紹介します。

●配信中的内容●

搾乳ロボット最新事情／都市近郊の地域資源を生かしたエコフィードを現地に見る／農福連携を現地に見る 青森県十和田市農工園千里平 ほか

ドキュメント! 畜産の新主役たち

このコンテンツでは、畜産物の安全性確保や6次産業化の取り組み、女性、障がい者など多様な担い手の活躍を「人」に着目して紹介します。

●配信中的内容●

畜産の未来を担う高校生 京都農芸高校／君は競馬のバックヤードを知っているか? 2019 競馬学校厩務員課程の生徒たち ほか

なるほど! 畜産現場

このコンテンツでは、畜産物ができるまでや、現場を支える職人たち、馬事文化など様々な内容を紹介いたします。

●配信中的内容●

酪農ロボット最新事情／酪農発展の歴史と魅力発信／畜産物が食卓に届くまでシリーズ ほか

グリーンチャンネル
でも放送中

--- 放送日 ---
毎週月～金曜日
朝7時～

「がんばる! 畜産! 3」

URL : <http://jlia.lin.gr.jp/ganbaruchikusan3/>

(お問合せ先)

公益社団法人中央畜産会 経営支援部 (情報)

TEL : 03-6206-0846 FAX : 03-5289-0890

